

ラオス国ビエンチャン市の水環境問題における行政組織のニーズに関する調査
 The investigation to reveal needs to water environment for the governmental institutions of
 Vientiane, Lao P.D.R.

○口分田 彩夏* 加藤 亮**

○Ayaka Kumode Tasuku Kato

1. はじめに

Nature-based Solutions（以下 NBS）は 2009 年に UNFCCC によって提唱されたコンセプトであり、International Union for Conservation of Nature によると、「社会的な課題を、効果的かつ適応的に対処し、同時に人類の幸福と生物多様性の恩恵を提供し、自然と変動した生態系を保護し、持続可能に管理し、回復するための行動」と定義されている。環境にやさしく、なおかつ経済的にも負担が少ない解決方法であるので、ここ 10 年で発足したコンセプトにも関わらず、ヨーロッパやアジアなど世界中で今日多くの都市や地域に採用されている。

ラオス人民民主共和国の首都ビエンチャンでは 2030 年に人口が 2005 年の倍の 144 万人にもなるとされており（JICA 2011）、急激な都市開発によって将来環境の悪化が危惧されている。人口の増加に従い生活排水などによる水質汚濁が懸念されており、昨今ではメコン川流域における水質調査が進んでいる。しかしビエンチャンには今現在下水処理場が設置されておらず、家庭から出た生活排水などは全て街を流れる小河川を通じでメコン川に流入しているのが現状である。

2. 目的

ビエンチャンの郊外は湿地帯が広がっている。湿地帯の水質浄化機能はすでに証明されており、ビエンチャンでは郊外の湿地帯を利用して生活排水を浄化する NBS の適応が期待されている。しかし、NBS を適応するためには現地での実際に起こっている課題に対する住民のニーズを知る必要がある。そこで本研究の目的を、ビエンチャンの水環境の課題を系統ごとに分類して、その原因を解明することとした。



Fig.1 ビエンチャン市の地図

3. 調査方法

ビエンチャンで行われた既存のプロジェクト（JICA, MRC）や調査の文献を通じて、ビエンチャンの水環境（水田、湿地、河川等）における課題を分類する。その後、現地に赴き行政機関に対する取り調査を行う予定である。

*東京農工大学農学府：Graduate school of Agriculture, Tokyo University of Agriculture and Technology

**東京農工大学農学研究院：Institute of Agriculture, Tokyo University of Agriculture and Technology

キーワード：ラオス、NBS、水環境